戦時下の文学〈その一〉

安永武人

はしがき

日本惨敗の日――一九四五年八月十五日、わたしは九州東部の海軍航空戦隊の司令部にいた。ポツダム宣言受諾のうごきについては、短波放送をつうじてその数日まえから士官室でもうわさにのぼっていたが、いよいよ正式に停戦命令が下達されてみると、それまで喧騒をきわめていた特攻基地が、うそのようなおもい静寂におおわれてしまった。参謀も士官も兵も、それぞれなにかを考えているような姿勢でうごかなかった。声をあげて泣いているものもいた。滑走路のそばの夏草にもえるかげろうと、そのむこうに真昼の太陽がてりつける豊後水道の海の光とが、その日の午後の異様な静寂のふかさとともに、いまも印象的である。そしてそのとき、わたしをいちばんつよくとらえていたのは、死なずにすんだというよろこびではなく、民族が滅亡するという悲壮感であった。士官室の空気もたぶんにそうであった。ただひとりアメリカ留学の経験をもつA軍医大尉だけが、おちついてわたしたちの判断のあやまりを指摘した。アメリカはそんな野蛮な国ではない、というのだ。だが、みなはそのことばを信じなかった。かれの説得にもかかわらず、青酸カリをわけあっていた。無知とはいえ、いまおもえば滑稽ともあわれともいいようのない心情であったが、しかし、わたしの内心には自分たちのそのときの状況をいまもなおいとおしむ感情のあることを否定できない。それは命をかけた行為がすべて虚妄におわった青春への愛惜にちがいない。が、みずから生命を抹殺する覚悟がきわめて自然にできるような状態にあったという事実は、ひとはたとえそれを悪夢として葬りさるにしろ、また感傷とよぶにしろ、わたしにとっては、いやすことのできないはずかしさと憤りと悲しみと恨みをもたらしているものなのだ。

「戦艦大和の最後」の著者・吉田満[1]は「戦争を人生の背景」とす

ることのできなかった、つまり「戦争そのものが人生」であった世代の存在を指摘しているが、あの十五年戦争を「人生の背景」として、したがって戦争に侵蝕されないおのれの人生をもちえた人たちもあったであろう。しかし「戦争そのものが人生」であった――小学校末期に第一次満洲侵略の開始、中学校で五・一五、二・二六事件、第二次満州侵略、高等学校で日中戦争、大学で太平洋戦争の勃発というふうに、つぎつぎに戦争にうかされながら自分をかたちづくってきた――わたしには、この時代をふつうよばれるように「暗い谷間」としてとらえる自覚的な認識はなかった。とくに奈落へむかってずりおちていっているのだという実感はまったくなかったといってよい。それだけに、かんたんには処理できない問題を戦後にもちこしてきている。事実、わたしには敗戦当時、切実に民族の滅亡を信ずるほど天皇制イデオロギーがしみついていたし、復員後かなりのあいだ敗戦責任を本気でかんじていた。戦争を天皇制軍国主義の被害者としての国民の立場でとらえはじめたのは、日本文学協会にはいってからである。まして、わたし自身を他民族への加害民族の一員として認識しえたのは、はるかにあとのことであった。その間、戦争目的の正当性を信じきった自己への憐憫・嫌悪と文献学的学風の無力さへの不信と日本古典への反発とをいだきながら、どうしてよいかわからぬ思想と行動との混迷をつづけた。戦後のめまぐるしい状況の変化に、たえず数歩おくれているという距離感をもちつつ対応しつづけてきたことは、こんにちもかわりないが、にがいこの体験がわたしをそうさせるのかもしれない。戦争体験にまつわるはずかしさと憤りと悲しみと恨みを、いまなおひきずっていることも、その一因になっているだろう。なかなか、すっきりと「戦後」にならないのである。いまさら「戦時下の文学」をとりあげねばならぬゆえんがここにある。

しかし、それだけではない。安保闘争以後、こんにちまでの文学状況が、一九三五（昭和十）年から三七年にかけての、日中戦争へ全面的に突入してゆく直前の状況に酷似していることへの不安もあるのだ。いってみれば「時代閉塞」の現実が、逆に文学の花咲く季節をもたらしていることへの危惧がある。安保以後の民族の現実はいっそう非人間的な苛酷さをふかめてきているにもかかわらず、文学界の大勢はそういう基本的な現実にかかわることなく、あたらしい芸術至上の道をすすみはじめている。文学を文学としてだけとらえるかぎりは、新風きそいたつ百家争鳴の観がないではないが、客観的には文学がその本来の役割を放棄しはじめた崩壊現象ともうけとれる点、日中戦争直前の文学状況と異質ではないとおもわれるからである。そこにはかつてのそれとはちがった意味をもつが「転向」の問題までも符節をあわせてふくまれているし、さらには林房

雄の「大東亜戦争肯定論」をうけとめるにあたって、衝撃らしい衝撃を感じなかった退廃的な精神状況も、あの時期にかよう文学者の状態というべきであろう。文学が文学でなくなってゆく――同時に人間が人間でなくなってゆく過程をあきらかにすることは、いわゆる「文芸復興期」の文学が退廃の花を咲かせた季節と、文学的出発の時期とがかさなりあっていたわたしにとって回避できない作業であるとともに、こんにちの文学の問題としても必要であるとおもう。そのばあい、根本的にわたしを規定しているのは「何ものかへの傾倒が一切なくて、ただ戦争の空しさへの呪いだけがある」という、その「呪い」ではなくて、「ひたむきな内心のたたかいがさまざまな形でちりばめられ、それを包む一切が空し」[2]かったという体験にほかならない。この体験に固執するほかに、わたしにとって文学についての発言の根拠はないのである。

①「戦争の文学」第六巻（東都書房）二九〇頁。

②吉田満「戦争参加者の立場から」（「中央公論」昭和四〇年九月号）林房雄の「大東亜戦争肯定論」を批判した一文。

一　いわゆる「戦争文学」について

一九三七（昭和十二）年の日中戦争の勃発は、日本帝国主義の中国への全面的侵略開始であった。しかし、そればかりでなく、その侵略が中国人民の果敢な抵抗にあって停滞しはじめると、ひきつづいて太平洋戦争がひきおこされ、それが日本の無条件降伏によって終結するまでの八年間、国民の生活と人生を根本から徹底的に破壊してしまった天皇制ファシズムの強圧が本格化してゆく起点でもあった。一九三四（昭和九）年、プロレタリア文学が壊滅したあと、日中戦争勃発までのわずかのあいだ、いわゆる「文芸復興期」がおとずれるわけだが、そのはなやかにみえた文学の季節の到来は、プロレタリア文学への文学的反動という側面をもつと同時に、いっぽう侵略戦争を強行するファシズムの支配にたいして、文学固有の方法でたたかう可能性を保証する根源――国民的現実とのかかわりを喪失していったという側面をもあわせもつものであった。文学が本来的な力を回復したという意味での「復興」ではもちろんなかったのである。だから、戦争勃発の翌年になると、たやすく「戦争文学」の台頭を招来することになる。火野葦平の「麦と兵隊」をさきがけとしてむかえた「戦争文学」流行の時期は、戦後になって「沈黙と韜晦が最高の芸術的抵抗」であったとされるような「非文学的時代」[3]であり、さらには「もっとも悪しき意味で、政治と文学が直結した、というよりは、文学が政治の奴隷になった時代」であり、したがってその文学は「奴隷文学」「ゼロの文学とすら云える」[4]とまで極論されたのである。これらの指摘に異論はない。しか

し、そのような文学の堕落をもたらした理由が「近代文学の批評精神」や「自我」の放棄[3]にもとめられると、究極的にはそういうこともいえるかもしれないとおもうが、いささか図式的な結論であって、はたしてそうスマートにわりきってよいのかという疑問をいだかないわけにはいかないのだ。敗戦以前の、いわば日本近代文学の崩壊がゆきつくところまでゆきついた底辺に位置するこれらの「戦争文学」を、日本における近代文学の一般的指標であった「批評精神」や「自我」を基準としてとらえることは、近代主義的な方法ではないかということである。「批評精神」や「自我」とは、いちじるしくかけはなれた精神や人間観が時代を支配し、これらの作家たちを拘束していたばかりでなく、むしろそこに生命の充実感や生甲斐をすらおぼえているかれらの姿を自己の問題としてみきわめなくてよいかということである。それは、たしかに前近代的といえるものだが、だからといってそれだけの理由できりすててしまうのは、あの戦争と日本人、戦争と文学とのかかわりが内包していたさまざまな問題をみのがしてしまうことになりはしないか。それは「奴隷文学」とよぶべきであろう。が、どこに文学が「奴隷」になりはてる原因があり、どのような過程をたどってそうなったのか、そのことをあきらかにすることが必要なのだとおもう。作家の精神とその文学との崩壊過程をつぶさにみることは、わたしにとって必要なばかりでなく、「戦争文学」について平野謙や小松伸六とはちがって、肯定的な評価をする戦中・戦後の批評家の見解が数おおくあることをおもえば、一般的にもそれは必要なのだといわねばならない。たとえば「麦と兵隊」について、この作品の発表当時、小林秀雄は「この作品のほんたうの美しさは、平常時の平常なよい文学の持ってゐる沈着な美しさと少しも変りはない」として「僕等日本人が肉体によって、それと理解してゐる伝統的な精神がこの作に生かされてゐる」「それは誰の心にも共感を起させる或る生きた民族の気質である[6]」といい、伊藤整は「この作品が世間に与へた印象は強烈で、どんな報道よりもよく戦闘する精神の実際を国民に知覚させた」「この作品の読者は、これが純文学作品であるといふことに気がつかずに読んだ。このことは純文学の勝利でなくて何であらう。昨日までは一片の人間私情を操るほかに役立たぬとされてゐた純文学の写生法によらなければ、この戦争の焔のやうな実体を国民に伝へることができなかったのだ[7]」といっているが、これらの意見が戦時下の思想・言論の統制によって、心ならずもそういわねばならなかったというような性質のものでなく、それぞれの文学観にねざしたきわめて積極的な主張であることに注目したい。しかもこの系統の見解はかたちをかえて戦後にもうけつがれている。「悠々と人間味の追及が行はれてゐる[8]」というのはいかにも井伏鱒二らしいのん

きさだが、河盛好蔵が「戦争謳歌の文学とは少しも考えず」「残酷な戦争に対する作者の悲しさ（積極的な怒りではなかったが）を読み取った」[9]というのにも疑問をかんじる。作品の部分的な一側面をもって、あたかも全体の本質的な特徴であるかのような印象をあたえる解説だからである。なお戦後の状況の変化につれて「戦争のうちに人間的なものを追及しようとするヒューマニズムが流れていて、以後続出した戦争文学中の圧巻となっています」[10]などという危険な解釈もでてきている。なにが「人間的」であり、どのような「ヒューマニズム」であるかをあきらかにしないで、こういう解釈をだすのは無責任といわねばならないが、そのこと以上に戦争体験への国民的視野にたつまともな反省を欠き、ほおかむりしているところに、文学者の姿勢としてみのがせない重大な問題がひそんでいるといわねばならない。「戦争の悲惨さの実感を強調するためには、まずこれを構成する個々の生甲斐の純粋さをあかしなければならない。しかも同時に、その生甲斐に陶酔する誘惑を、断乎としてしりぞけなければならない」[11]というのが、戦争体験を問題としてとりあげるばあいの基本的な姿勢であるはずだ。にもかかわらず、「人間的」といい「ヒューマニズム」という用語の無規定の使用は、ここにいう「生甲斐に陶酔する」ことになるからである。

戦時中はもちろんのこと、戦後においても「戦争文学」は、かなり肯定的にうけとめられてきた。でなければ黙殺されるか、一方的に否定されるかしている。そのいずれをとるにしろ、作品そのものなかには、こんにちの状況においても看過できない問題がふくまれているし、とりわけ「文学が政治の奴隷になった時代」の思想をまともに生きたものにとっては、はっきりと究明しておかねばならぬ問題がのこされているとおもうのである。

ここにとりあげるのは作者が軍人として戦場にのぞんだ火野葦平の「麦と兵隊」「土と兵隊」（一九三八年）を中心として、付随的に上田広「黄塵」（三八年）日比野士朗「呉淞クリーク」（三九年）などもあわせ考えたい。（いずれも戦中版[12]をテキストとする。戦後版には加筆削除のほどこされているものがあるからである。）

③ 平野謙「現代日本文学入門」（要選書）五〇頁。
④ 小松伸六「戦争文学の展望」（改造社「昭和文学十二講」所収）一九〇頁。
⑤ 小松伸六（前掲書）一八九頁。
⑥「事変と文学」（創元選書「文学2」所収）三一頁。
⑦「支那事変と文学」（昭和書房「文学と生活」所収）七九頁。
⑧「昭和文学全集」（角川書店）第四六巻「解説」三九五頁。
⑨ 新潮文庫「土と兵隊・麦と兵隊」解説、二二三頁。

⑩ 吉田精一「現代日本文学史」（筑摩書房）一五五頁。
⑪ 注②におなじ。
⑫ 「麦と兵隊」「土と兵隊」「黄塵」（以上いずれも改造社・昭和十三年版）「呉淞クリーク」（「中央公論」昭和十四年二月号）。

1

火野葦平の「麦と兵隊」は、一九三八（昭和十三）年四月にはじまった日本陸軍の徐州攻略戦を主題とした作品であるが、これは、「土と兵隊」や「黄塵」「呉淞クリーク」とちがって、火野自身が戦闘員として参加した作戦ではない。かれはその三月「糞尿譚」で第六回芥川賞を受賞したため、軍に文才をみこまれ、にわかに実戦部隊からひきぬかれて派遣軍報道部へ転属させられ、兵隊の身分のまま部員として従軍したのである。しかし報道部内に「世界の戦争文学でも『西部戦線異常なし』などの傑作は、すべて戦後十年も経ってから出ている。戦争中に戦争を書くことには無理があるから、今すぐ書かなくてもいいのだ。しかし、将来、君が戦争文学を書く場合、きっと、この徐州会戦は大きな参考になるだろう」[13]という報道班長M中佐の意見、また「ほんたうの戦争文学や名画は戦争中には出来ないで、数年数十年の後に初めて現はれるのだと云ふ人がある。こんな議論は戦争の目的を立派にやり遂げた後で、ゆっくり片付けて貰ひ度い。今は苟も人一人は自分の天分のありったけを出しきるべき秋なのだ」「歩兵伍長としての玉井（火野）が書かずにをれなくて書いた、これこそ純乎たる戦争文学だ」[14]という班員T少佐の意見などがあるところからみれば、かならずしも火野にたいする軍の期待は統一されたものではなかったように推定される。が、火野自身はその執筆動機についてこの作品の「前書」[15]で「戦場の最中にあって言語に絶する修練に曝されつつ、此の壮大なる戦争の想念の中で、なんにもわからず盲目のごとくになっていることを告白し、「この偉大なる現実について何事も語るべき適切な言葉を持たない」「今は戦争については何事も語りたくない」といいながらも、なお「現在、戦場の中に置かれてゐる一人の兵隊の直接の経験の記録を残して置くことも、亦、何か役に立つことがあるのではないかとも考へ、取りあへず、ありのままを書き止めて置くこと」にしたという。ところが戦後のかれ自身による解説はこれとちがっている。この「稿をおこしたのは、魂の奥底から私を駆りたてるものがあったからだ」「徐州戦線で見て来た兵隊の惨苦と犠牲との姿を銃後の人たちに知ってもらいたいこと、私自身が孫圩（そんかん）城で九死に一生を得た経験を、印象の生々しいうちに書きとどめておきたい」[16]かったと述べている。「前書」とこの解説とでは、ちょうど二十年の

へだたりがあるから、火野の心境や思想にも変化がおこるのはとうぜんだろう。「何か役に立つ」というのは将来「戦争文学」執筆のさいの資料にするというほどの意味もふくまれていたかもしれないが、直接的には「銃後の人たちに知ってもらいたい」という意図であったことは、作品そのものからみてあきらかであるから、その点だけがつらぬかれているといえるのであって、動機の他の部分にはかなりのずれが認められる。解説に「九死に一生を得た経験」を記録したいという個人的動機がくわわったのは、それだけにとどまらないで「兵隊の惨苦と犠牲」をいっそう具体的に強調する役割もはたすわけだから問題はないだろう。ただ、T少佐の「書かずにをれなくて書いた」という証言と、かれ自身の「魂の奥底から私を駆りたてるものがあった」というのは符合する。したがって戦中・戦後をつうじて火野をとらえていたものは「兵隊の惨苦と犠牲」にたいする感動であったということができる。そうすれば「壮大なる戦争」「偉大なる現実」という戦争についての認識と、戦争のなかで「なんにもわからず、盲目のごとくな」っていたという自己認識とが、戦後に解説を書くにあたって、はぶかれてしまったのはなぜだろうか。当時の軍のきびしい検閲を戦後かれがしばしば強調している――作品の本文では「二十七ケ所が削除訂正されていた」[17]といっている――ように、そのことのために軍の心証を害さないよう戦争

認識については配慮して書いたものであったから、戦後にはそれにふれなかったともいちおうはうけとれる。しかし、この「前書」について検閲による削除訂正の事実があったことはどこにもふれていない。のみならず、本文の削除部分は戦後版で復元されているのに、この「前書」は完全に省略されて「徐州会戦従軍日記」という副題にとりかえられてしまっている。この事実は、戦争否定の思想が支配的な戦後の風潮のなかで、それをそのまま掲載することがためらわれたというよりも、もっと根本的には、この「前書」にはしなくも露呈しているかつての自己とその思想を、悪夢のような過去としてきりすててしまいたかったのではないかと想像される。敗戦の年の秋「悲しき兵隊」の短文を最後にいったんペンを折ったかれの心境はそれをうらがきしている。だが、かれが戦後になってもなおうしろめたさをおぼえないで提出できたのが、こんにちみる「麦と兵隊」、つまり「兵隊の惨苦と犠牲」にたいする感動の定着であったのである。しかし、この「前書」は火野によって葬られたとしても、なお問題をのこしている。戦争の渦中になげこまれた一兵士として「盲目」状態におちいっていたというのは、文章の前後関係からみても戦争の全貌・目的・本質がつかめていなかったことをものがたるとしか考えられない。しかもこのような「盲目」状態にあることと「壮大なる戦争」「偉大なる現実」という把握とは、こと

ばの厳密な意味においては矛盾しているといわねばならないだろう。しかし、この作品をよみとおしてみると、かれにとってけっしてそれは矛盾ではなかった。「壮大」といい、「偉大」というのは、戦争の全実体が正確にとらえられたうえでの形容ではない。そう形容することによってしか自己を正当化する——自己の戦闘行為が正義の立場でなされているとみずから納得する——ことができなかったからにほかならない。「なんにもわからず」日日の戦闘における「惨苦と犠牲」によく耐えようとすれば、作品がものがたっているように、それは歴史的に形成されてきておのずから身についている素朴な正邪意識・優越的な民族意識・血縁的な同胞意識などによってささえられるほかはなかったであろう。そのような意識にささえられたとき、「盲目」であっても、みずからが参加している戦争を抵抗なく「壮大」「偉大」と誇称することができたのではないか。ここに戦争の実体とそれをとらえる国民の意識とのあいだにふかい溝がよこたわっていたし、戦争推進の主役・軍国主義者に乗ぜられるすきがあったのだ。

火野ばかりでなく、上田広、日比野士朗の作品においても、文学者として中国との戦争の意味や本質をさぐろうとしたかすかな気配もみることができない。軍の検閲という事情も考慮にいれなければなるまいが、ただそれだけが理由であったのならば、おなじ年に執筆され発禁処分をうけた石川達三の「生きてゐる兵隊」の例からみても、どこかにその片鱗がうかがえるはずである。しかし作家としての苦悶の色をどこにもみいだすことができない。それはなぜか。岩波文庫を創刊以来よみつくしていたという一インテリ伍長が「戦争と云ふものは、斯くして国民全体を鍛へ直して行くものであり、それが正しい道への進展であり、鍛練であるならば、仮令痛々しいものであっても癒す為にしか傷つけないものである」「誰一人として明日の知れない命について、深刻な考へを懐いてゐる様なものはなかった」[18]と書きのこし、農民兵士のひとりは「軍隊は運と要領一つだ」と愚弄しながら「お国にささげた生命、キミの覚悟もできているか。決してみぐるしき振舞あってはなりません」[19]と書きおくっているところをみれば、戦争目的不問の傾向は、国民のあいだにもはや一般化していたとみてよいであろう。これらの兵隊作家たちもその例外ではなかったということである。もちろん、思考の放棄をよぎなくさせるほどの苛酷な作戦や訓練が、日本軍隊の統制方法のひとつとして有効にはたらいていたこともみのがしてはなるまい。近代的軍隊ならはとうぜん日常生活を律する原理の延長線上に意識されるはずの戦争の意味が、その日常生活の閉鎖的前近代性と軍隊内の「支配関係を家族関係におきかえ、家族的な親愛感を利用」[20]することによる抑圧感の解消と「国民の自由を圧殺し、民主主義の芽

を踏みにじることによって成立した天皇制[21]軍隊に固有の思考放棄とによって、とことんまで問いつめねばならぬ必要を、おおくの国民と同様、この作者たちにもかんじさせるにいたらなかったのだとみることができるであろう。その意味で火野は当時の典型的な軍人の思考の型を身につけていたといってよい。だから、これらの作品においては、せいぜい当面する一作戦、一戦闘の目標しかとらえられていない。「今度の徐州大包囲戦は、蔣介石が七箇年の日子を費して構築したといふ堅陣に集結されてゐる約五十万の敵軍を一挙に殲滅するといふ大作戦なのだ」（「麦と兵隊」）「敵は対岸に堅固な陣地を築き、一歩たりとも日本軍をわたすまいとかまへてゐる。蔣介石直系軍、いはば敵の精鋭である。むろん私たちには激しい決心があった」（「呉淞クリーク」）というように、眼のまえの「敵」についての認識と敵愾心があるだけである。戦闘目標があって戦争目的の自覚されない敵愾心は、非戦闘員である「敵」国民にむかっても暴発し残虐行為をひきおこすいっぽう、「やれるだけやらう、誰のためでもないお国のためだよ」（「黄塵」）「我々の前途には如何なる苦難があり、いかやうな凄絶なる戦場が待ってゐるか、想像もつかないが、何があってもよい、我々はただ進んで行けばよい」（「土と兵隊」）という、もはや戦闘目標すら想定しえない行動至上にもおちいる。そしてかれらの作家精神をささえているのは、こざかしい理屈をもてあそばないで黙々と行動する日本兵士の「美しさ」への感動であった。

死の戦場から戦場への僅かな休養の時間に於けるこの快活さは一見不思議のやうである。（中略）私はそこに逞しい不敵さを感じるとともに一種の不気味さも感じる。（「麦と兵隊」）

という「兵隊」の再発見とそれへの驚きから、さらにすすんで、

どの兵隊も、足を痛め、胸苦しく、歯を食ひしばって歩いてゐるに違ひないが、ここから見てゐると、寧ろそれはただ颯爽として、美しくさへ見える。いや、私はまさに、次第に、かくのごとくも世に美しき風景があらうかと感じ始めた。かくのごとくも一個一個が譬へ難い労苦に満されながら、それが全体として非常に美しく見えるといふことは、見えるのではなく、ほんたうに美しく、強く、勇ましいのだと感じた。（「土と兵隊」）

という美感にいたると、それは美意識の変革にとどまらず、火野と兵隊との一体化――かれの人間変革が完了したことを意味する。ここには、兵隊であることをのりこえようとする作家としての不逞な精神があるのではなく、そういう精神を否定して、求道的に兵隊であることに徹底しよう、そのことをとおして民族の「聖戦」に寄与する文学の誕生がありうると確信している思想がある。すなわち、あとでも述べるように、戦場で発見した現実の人間像が、文学の創造

すべき人間像にとってかわったのである。文学が文学でなくなる、つまり作家が戦争の奴隷になることによって、文学が政治の奴隷になる契機がここにひそんでいたといわねばならない。

とくに火野のばあい、かれが作品執筆当時、検閲を意識してなにほどかの配慮をよきなくされただろうことは想像できる。けれども、削除部分が主として日本軍による中国人捕虜の殺害場面にかきられている事実をもって、かれが戦争の意味や目的に疑問をいだき、反戦という立場で積極的にそれを描いたのだとみるのは妥当であろうか。「麦と兵隊」で削除された部分と、ほぼおなじ性質の場面が「土と兵隊」においてもふたたび削除されているが、そのように日本軍の残虐行為を描いていることをもって、ただちに反戦思想や侵略戦争への批判を表現しようとしたとみるのは早計である。かれの「兵隊三部作」ばかりでなく、戦場に取材したほかの全作品の内容や、かれ自身、日本軍部の戦争目的を明確につかんでいなかった点などから考えると、むしろ、そういう残虐場面の描写は、模範的兵隊であり古武士的人情にとむかれが、かれのなかに成立している美化された観念的な「皇軍」――「壮大なる戦争」をたたかう天皇の神聖で偉大な軍隊にあるまじき行為として反発し批判したのだとみなければ、作品の一貫性がうしなわれる。「国家ヒエラルヒーの中で矮小化し、無力化した民衆の自我が国家またはそのシンボルとしての天皇の強大さと膨張にその代替をもとめた姿」[29]は、このときの火野にもみとめなければならないのである。作品をとおして、日本民族が中国民族を武力をもって制圧しつつある戦闘現象の、そのおくにある本質をとらえようとする文学者の鋭利な眼はみられないからだ。もしそれがあって、心ならずもねじまげられていたのだとすれば、全篇はもっと苦渋にみちた作者の声にならぬうめきがこめられていたはずである。「我々の同胞をかくまで苦しめ、且つ私の生命を脅してゐる支那兵に対し劇しい憎悪に駆られた。私は兵隊とともに突入し、敵兵を私の手で撃ち、斬ってやりたいと思った。私は祖国といふ言葉が熱いもののやうに胸いっぱいに拡がって来るのを感じた」（「麦と兵隊」）「城壁の上にひらめく一本の日章旗があった。私は身内がずんとするやうな感動を覚え、歩きながら涙の溢れ出て来るのを禁することが出来なかった」（「土と兵隊」）というのが火野のいつわらぬ姿であったのだ。これをもうそであったと強弁することはできないであろう。機械化されたちいさな戦闘単位としての思考や感動にはまりこんで、巨大な戦争の全的把握を欠き、それにもかかわらず「壮大なる戦争」「偉大なる現実」として実感をもって信じきれたところに、戦争目的にたいする根本的な懐疑や批判がうまれてくるはずはなかった。ここにこれらの「戦争文学」の基本的な特徴がみられる。

⑬「火野葦平選集」（創元社）第二巻「解説」四〇二頁。
⑭「麦と兵隊」「あとがき」二三三頁。
⑮「麦と兵隊」三〜四頁。
⑯ 注⑬におなじ、四〇八頁。
⑰ 注⑬におなじ、四二〇頁。
⑱ 太田慶一「戦死せる一無名伍長の日記」（「中央公論」昭和十四年二月号）。
⑲ 佐々木徳三郎（岩波新書「戦没農民兵士の手紙」所収、九六頁）昭和十三年三月付。
⑳㉑ 藤原彰「確立期における日本軍隊のモラル」（「思想」昭和三十年五月号）。
㉒ 社会心理研究所編「社会心理史」（誠信書房）一一三頁。

2

しかし、もともと帝国主義的侵略であった対中国戦争について、政府とくに軍部は国民を眩惑するスローガンをかかげて、その本質を極力隠蔽することにつとめた。そのなかにあって国民がみずから生命をかける戦争の意味を、自分自身に納得させるのは、あまくだりのスローガンをそのまま信用できないばあい、きわめて困難であったはずである。自己説得のために観念的に意味をあたえてみたり、あるいはついに戦争目的不問におちいることで、上からのスローガンにはまりこむ結果になったりしたとしても、一方的に責められない状況がじつはあったのだ。一九三一（昭和六）年の第一次満州侵略以来、日本の「生命線満蒙の危機」というきちがいじみた宣伝は、「共産党とその影響下の大衆団体」が「日常の経済的諸要求のための闘争を帝国主義戦争反対とむすびつけて、はげしく宣伝扇動を展開した」[23]にもかかわらず、国民の抵抗をしだいに制圧し、天皇制へのつよい信仰を媒介として、国民一般にふかく滲透していったが、いよいよ大規模な全面戦争がはじまるこの段階におよんで、反戦反ファシズム闘争に主要な役割をはたすべき組織は、すでに自壊作用をおこしていた。たとえば、社会大衆党はすでにはやく一九三四（昭和九）年に「軍隊と無産階級の合理的結合」を提唱してたたかいを放棄し、日中戦争勃発以後は総同盟が「同盟罷業の絶滅」を宣言して軍部への協力を誓い、社会大衆党もまた「日本民族の歴史的使命達成の聖戦を積極的に支持」して、軍部の中国大陸侵略政策に屈服するにいたった。[24] ファシズムへの抵抗がこのように崩壊してくると、国民の思想と行動を軍部はおもうままに統制することができるようになる。「挙国一致、尽忠報国、堅忍持久」をスローガンとする国民精神総動員運動の展開、文部省編纂の「国体の本義」による「祭政教の一致」の強調、日独伊防共協定の締結などのほ

か、三七年から三八年にかけて国民にたいする思想的弾圧・統制はいっそう強化された。戦争にたいして非協力的・批判的とみられた作家・学者・組織が検挙・解散によって活動停止をよぎなくされた[25]など、その一例にすぎない。内閣情報委員会が内閣情報部に改組されて現役将校が直接「差止め事項の通達や編集内容への注文」をつける事態もでてきた。産業報国会の発足にいたって、もはや反戦反ファシズムのたたかいは、その可能性をほとんどうしなったといわねばならぬ段階がきた。「愛国行進曲」のレコード一〇〇万枚をうりつくし、吉川英治の「宮本武蔵」が剣禅一如の戦闘精神を鼓吹するのに役だったように、軍国主義化・国粋主義化したマスコミは国民の魂を奴隷の道へみちびくのに狂奔した。このようなファシズムの支配が、その当初においては抵抗があり、それが強圧・束縛として意識されたにせよ、その「完成期」――「上からの国家統制の一方的強化の過程[26]」――にいたって、国民の心情にむすびついて不動の安定を示しえたのには、国民の天皇信仰とそれを基調とするゆがんだ民族意識が根元的な契機として、つよく作用していたことをみのがしてはなるまい。火野をはじめ兵隊作家たちも、この制約から自由ではなかった。国策すなわち天皇の意志への共鳴や参与が、おのれの個人的・人間的欲望を抑制し、あるときはそれを罪悪視し、国民的規模において積極的に進行しはじめる。「滅私奉公」というのは、スローガンにとどまったのではなく、狂信的にそれを実践させる力を天皇制はそなえていたし、国民のがわにもそれをうけとめる精神的・思想的基盤があったのだ。個より家が優先する家族制度の論理と心情が、明治以来、天皇制国家にそくして拡大再生されてきていたが、公私の区別意識の伝統は強化されて、「公」を「私」より優先させる論理が、国民ひいては兵隊たちの行動を決定するばあいの基準となっていた。そのために、戦争遂行政策が天皇の意志として国民のまえにあらわれたとき、それは絶対的なものとして、ほかの一切の私的なものに優先してうけいれられ実践にうつされたのである。だから戦争の意味についての思考放棄は、国民の意識にたいするファシズム支配体制の誘導・弾圧と、国民自身のがわにあったこの精神構造との相互補強の結果であるとみなければならない。「戦争文学」の作者たちは、とくに生命の危険にさらされる戦場にあって、なおかれらをささえた家族主義的集団としての軍隊内の人間関係へのふかい共感・感動、それへの「陶酔」によって、いっそう自然に、そして強力に天皇の意志に順応できるようになっていたといえる。小林秀雄のたたえた「伝統的な精神[27]」の実質は、これにほかならなかったのだ。

㉓ 井上清ほか「日本近代史」下巻（合同出版社）二二九頁。

㉔ 石井金一郎「日本ファシズム」（東大出版会「日本歴史講

座」第六巻所収）二四一頁。

㉕ 遠山茂樹ほか「昭和史（新版）」（岩波新書）一六七頁。

㉖ 畑中繁雄「覚書昭和出版弾圧小史」（図書新聞社）一三三頁。

㉗ 丸山真男「現代政治の思想と行動」上巻（未来社）三五頁。

㉘ 注⑥におなじ。

3

これらの作品に描かれている実戦部隊は、内地の通常の訓練部隊では想像もおよばない、軍隊の階級秩序をこえた家族主義的な人間関係をもっている。それへの作者たちの共感は、随所に力をこめて感激的に描かれている。上官と兵とのあいだに、おもいやりと信頼があって、一見それは無階級集団であるかのようにさえみえる。そこには横暴・無慈悲な上官もなく、卑屈不遜な兵隊もいない。作者たちが当局の検閲を意識したせいもあろうが、それとともに自分たちの「惨苦と犠牲」を直視するのがたえがたいために、自分の周囲を美化して描くことによって、その苦痛からまぬがれたいという心理もはたらいていたのかもしれない。しかし、どの作者もが、感激をもっていちばん情熱的に書き、戦闘のなかで自分をささえるものとしてそれに共感し、生甲斐をかんじているところをみれば、あながちそういう理由とばかりはいえないのであって、作者たちの心情

につよくくいいってはなれないものがあったからにちがいない。

部隊長が一々負傷者を見舞って居られる。御苦労であった、と一口云はれるだけであったが、よくやってくれた、といふ敬虔なる無言の感謝の心が判然と温容な部隊長の表情の中に見て取れた。（「麦と兵隊」）

高橋一等兵は担架の上から首をあげて私を見た。班長殿、すません、すません、とさう云った儘、眼にきらきら光るものが見えた。（中略）すまなかった、と私も一口云ひ、涙が出て来て止まらなかった。（「土と兵隊」）

安全装置を解いた日沢一等兵と私は、入支以来初めて得た発砲の機会をあわただしく味ふことで、とけ合ふやうな友情をそのとき感じた。（「黄塵」）

おお君か、今度こそは華々しい一戦になるかも知れんぞ、ひとつしっかり記録にとめておいてくれたまへ――これが部隊長のあたたかみの溢れた言葉であった。私はふと胸が一杯になり、そのまま次の交通壕にをどりこんだ。（「呉淞クリーク」）

など、作者たちがいちようにふかい感動をもってこれらの場面を描いていることは、おおえない事実である。しかもこのような作者の感動的表現は、いずれの作品においても若干の例にとどまらない。むしろ、それらの作品の根本的な基調となっているとすらいえるの

である。たえず生命の危険に直面する戦場にあって、平時の軍隊における階級秩序をこえた関係がでてくるのは、とうぜんといえる。

「死んでも構はんと思ふ。私は胸に手を当ててしっかり心臓を押へた。恐怖でないと自弁してみるが、恐怖に違ひない。然し私は努めて平静を装って居る。周囲には負傷した兵隊や、多くの兵隊がものも云はず、眼をきょろきょろさせて居る」ような緊迫した戦闘状況のなかで「誰かが何か云ふと、つまらぬことを云って居るのに、縋るやうに凝視して聞耳を立てる」（「麦と兵隊」）心理は、生死のせときわにたつ人間の恐怖に耐えられない姿を如実にうつしだしている。この仲間にすがらずにはいられない心理は、さらに虫・めだか・草花など、およそ生命のあるものすべてにたいする愛着や共感となってもあらわれる。そこにわずかに人間性の崩壊を反射的にくいとめようとしているひたむきな眼ざしをよみとることができるが、それはいたましい戦時下日本人のひとつの極限的な姿であったといってもよいであろう。しかし、仲間をもとめる人間自然のこころのうごきは、究極的には軍隊個有の家族主義的心情のなかに吸収され組織されてゆく。ほんらい日本の軍隊は徴兵制度によって出身にともなう社会的階級性を否定する一面をもつことで「擬似デモクラシイ」[29]の錯覚をあたえたが、それと同様に、あらたにくみこまれる軍隊の階級秩序のもつきびしい上下関係もまた、戦場においては家族主義的な人間関係に身をゆだねることによって解消されたかのような印象をもたらしている。火野たちを感動させているのは、この連帯感であって、家族主義的心情の交流が、「惨苦と犠牲」に耐えさせる唯一の精神的なよりどころであったのだ。しかし、上下関係そのものが解消されたのではなく、それが親分子分的な関係に変質しているにすぎない。いってみれば擬似連帯である。死に直面して神との対話をもつことのできないおおくの日本人兵士にとって、家族主義的心情の世界がそれにかわるものとして作用したのは、きわめて自然であった。戦場という異常環境における日常性の回復——もっとも肌にあい、ちかしいものとしての家族的連帯の再生が、死にのぞんで唯一の安心立命のささえとしてはたらいたといえる。作者たちに、これへの「陶酔」があり、それが戦中・戦後の批評家たちに「人間味」あるいは「ヒューマニズム」といわせたものなのである。

しかし、このような家族主義的な関係につよくこれらの作者たちがひかれているのには、もうひとつ理由がある。かれらがインテリであるがゆえに、庶民出身兵にたいして、心身ともに劣弱であるといううしろめたさをもっているのがそれだ。『『愛国行進曲』になり、『戦友』の歌になった。私は何時か兵隊達と和してゐる自分に気づいた時に、はっと歌ひやめ、その感傷を嗤ふべきだと考へたが、然

も、これらの切実なる感傷をさへ反省することこそが、嗤ふべき感傷なのではないか、と、思った」（「麦と兵隊」）という自戒から「私は私の部下を死の中に投じ得ると云はれた偉大なる関係に対して、その責任の重大さを思ひ、その資格について危惧してゐたけれども、それは何も考へるほどのことではないことが判った。それは又思想でもなんでもない。私が兵隊と共に死の中に飛び込んでゆく、兵隊に先んじて死を超える、その一つの行為のみが一切を解決する」と考え「我々の間には限りない信頼と勇気とが生まれた」（「土と兵隊」）といえるようになるまでの火野の思想の変化の過程は、火野流の「近代の超克」ともいうべきものであって、インテリ特有の思弁的煩雑さをきりすてて、庶民出身兵のもつ単純明快な行動原理とたくましい行動力へちかづこうとするかれのせつない努力がうかがえる。懐疑癖と優柔不断を克服してそういう兵隊にちかづきえたという確信をもったとき、兵隊とのその一体感は、軍統制の手段として意識的につくられた家族主義的関係を積極的にうけいれる基盤となったのである。が、それと同時に、まえに指摘したように、この家族主義的な心情への「陶酔」は文学が文学として自立することをさまたげる条件ともなったのである。「なにもかも神様がごぞんじだよ、問題は手柄がたてられるかどうか」とつぶやく「年嵩の男が、かくも敵弾を前にして平然たり得る理由に思ひいたって瞳の霞むものを感じ」（「黄塵」）るのも、インテリ作者の劣等感と、ひいてはそれの家族主義的連帯感への傾斜のあらわれにほかなるまい。こういう連帯感こそが、日本軍の戦闘力の根源であったし、またさらにそれを「美しい」とするこれら兵隊作家たちに、自分たちの戦闘体験を克明に書きつづらせた表現衝動の源泉ででもあった。したがってこういう連帯がうしなわれるとき――とくに戦友の戦死のばあい――きわめてはげしい敵愾心がもえあがる。戦友の遺体を焼く「火は次第に身体に移り、乗本一等兵は生きてゐるやうに動いた。私はその悲しみの底から深い憤怒の感情がやまれぬもののごとく、蠢き立ち騒ぐのを感じた」（「土と兵隊」）など、身ぢかな親しいものを殺されて、はじめて実感となるような、いわば仇うち意識とむすびついた反射的な憎悪を示すものであり、自己の集団にたいする原始的な防衛本能とでもいうべきものの表出であって、それだけにその感情はすさまじい強烈さをもっていた。罪もない非戦闘員の虐殺がおこなわれたのもゆえなしとしない。火野のこれらの作品は「彼の到達した感情は、日本の兵隊のよさに対する讃仰であり、祖国に対する愛情であり、同じ血縁に結ばれたものの友愛の歓びである」[30]と当時いわれたが、「讃仰」といい「愛情」「友愛」というものの実体はすでにみてきたとおりであって、一言でいえば、家族主義的な連帯感情を中核とする盲目的な同胞意識といわねばならな

いものであった。

この盲目的な同胞意識は単純な正邪意識と優越的な民族意識とを、その両側面としてもっていた。これらの作品に登場してくる兵隊は、ひとりの例外もなく、自分を正義の立場に、したがって中国軍隊を不正の立場にたつものと信じてうたがわない。それとわかちがたくむすびついて日本民族の優秀性への確信があった。「朴訥にして土のごとき農夫等に限りなき親しみを覚えた」「一家の繁栄と麦の収穫とより外には彼等には、何の思想も政治も、国家すらも無意味なのであらう。戦争すらも彼等には、ただ農物を荒す蝗か、洪水か、旱魃と同様に一つの災難に過ぎない」（「麦と兵隊」）というが、その「限りなき親しみ」は、かれの農本主義的農民観によって、かってにつくりだされた中国農民像へのそれであって、「これらのはがゆき愚昧の民族」（同前）という認識がものがたっているように、優越者としての侮蔑のうらがえしにほかならない。とくに「思想も政治も、国家すらも無意味」という断定が、一民族にたいしてこのうえもない侮辱のことばであるとはまったく気づいていないのだ。そういうおもいあがった意識の根底には、中国民衆にたいする救世主という自己規定があった。「彼等は自分の国のよさをてんで知ってません。例へば山西省の石炭について考へてみても」「彼等は自分等が使ふぐらゐしか掘ってゐない、さういふ民族です」「つまり彼等のもつ領土のよさ、それを知らせるのが第一です」（「黄塵」）というのは、「愚昧の民族」の啓発指導を素朴に任務として信じているもののいいぐさである。この傲慢さは戦場という異常環境であるとはいえ、他民族の願望も要求もまったく無視しながら救世主と自任する善意、つまり優越意識のもたらすものなのである。と同時に、他民族によって支配される立場にみずからをおいて考えてみることのない民族のつよさとよわさとをみることができる。「一番体のへばってゐるときに敵と肉弾戦をやるやうになりはしないか」「最後の五分間で決定する戦闘といふものは、すべてさういふ状態のときに起るものなのだ、そのときには優れた民族が勝ち、劣った民族がはっきり負ける」、しかし「今度のチャンコロは馬鹿にするとひどい目に遇ふ」（「呉淞クリーク」）というのもそれである。中国民族を劣等とおもいこみ、頑強な抵抗にであうと、めずらしい、常ならぬ事態としての奇異の感じしかもたない。しかし、中国がわでは困難をきわめた国共合作がねばりづよく推進され、「労働者、農民、市民、学生、さらに兵士たちは、愛国の熱情にもえて抗日の戦線にくわわ」[31]り、三七年九月、抗日民族統一戦線が結成されていたのである。それにもかかわらず「徐州に近づくにつれて、我々は土民が軍隊とともに我々に反抗するのをしばしば見た。しかしながら私にはそのやうなことは、農民にとって土と協同することのたの

しさほどに深刻ではないものと思へる」（「麦と兵隊」）という、てまえがってな認識におちいっていて、中国民衆の眼に、日本軍が侵略者、加害者としてうつり、それゆえに「土民」も参加する必死の抵抗が展開されているのだということには、おもいいたっていない。不遜であるとともに無知であり、日清・日露戦争以来、天皇制権力があらゆる機会を利用して国民のなかにうえつけてきた日本民族の優越性という観念、そのうらがえしとしての他民族、とくに東洋諸民族の劣弱性という認識が、これら兵隊作家たちにも、みごとに定着しているのをみることができる。

事実をただ忠実に記録してゆく方法では、こういう伝統的な民族意識への無自覚を、自覚的なものへきりかえる契機をつかむことができなかったのはとうぜんである。日本の歴史や現実の重みを、いわば自己のゆがみを、文学表現という客体化の作業をとおして、意識的に、否定的にとらえなおすのでなければ、それは文学の名にあたいしないといわねばならない。ところが意識的・否定的であるかわりに、それへの「陶酔」しかなかったという意味で、これらの作者たちは文学的に敗北していたといわねばならないのである。

㉙ 丸山真男（飯塚浩二「日本の軍隊」所収「座談会」、東大出版）八三頁。

㉚ 杉山平助「文芸五十年史（旧版）」（鱒書房）四五二頁。

㉛ 注㉓におなじ、二五六頁。

4

「麦と兵隊」の結末は、戦中版ではつぎのようになっている。

敗残兵は一人は四十位とも見える兵隊であったが、後の二人はまだ二十歳に満たないと思はれる若い兵隊だった。聞くと、飽く迄抗日を頑張るばかりでなく、こちらの問に対して何も答へず、肩をいからし、足をあげて蹴らうとしたりする。

私は眼を反した。私は悪魔になってはゐなかった。私はそれを知り、深く安堵した。

この最終段落と、そのまえの場面とのあいだには、飛躍があってつながらない。なにから「眼を反し」、なぜ「悪魔になってはゐなかった」のか、誰にもわからないからである。戦後版をみると、その削除されたとおもわれる部分がつぎのように補充されている。

はなはだしい者はこっちの兵隊に唾をはきかける。それで処分するのだということだった。ついて行ってみると、町はずれのひろい麦畑にでた。（中略）横長いふかい壕がほってあった。しばられた三人の支那兵はその壕をまえにして坐らされた。うしろにまわった一人の曹長が軍刀をぬいた。かけ声とともに打ちおろすと、首はまりのようにとび、血が篩（ふるい）のように噴きだして、つぎつ

ぎに三人の支那兵は死んだ。

これでようやく「眼を反した」理由がわかる。これは軍の検閲によって削除された部分を、戦後、原稿がみつからないまま、作者が思いだしながら書きくわえたといっているところである。だから、もとの原稿そのままの復元とはいいきれないだろうが、内容的にはそうかけはなれたものではないとみてよい。とすれば、「皇軍の威信」を宣伝してやまなかった軍当局が、こういう場面を削除した事情はよういに想像できる。捕虜処刑の残虐場面が、銃後の国民によまれたとき、どういう反応をおこすか、それをおそれたからである。では、かれが「すいぶん気をつけて書いたつもりだったのに、なお私の判断は誤っていたらしい」[8]というこの場面は、かれのどういう思想にねざして描かれたのだろうか。それを考えるにあたって、みおとせない例がもうひとつある。「土と兵隊」の「十一月十三日」の一節で、戦中版にはなくて戦後版にはくわえられているつぎの場面である。

……散兵壕のなかに、支那兵の屍骸が投げ込まれてある。壕は狭いので重なり合い、泥水のなかに半分は浸って居た。三十六人、皆殺したのだろうか。私は黙然とした思いで、又も、胸の中に、怒りの感情の渦巻くのを覚えた。嘔吐を感じ、気が滅入って来て、そこを立ち去ろうとすると、ふと、妙なものに気づいた。屍骸が動いて居るのだった。(中略)彼は懇願するような眼付で、私と自分の胸とを交互に示した。射ってくれと云って居ることに微塵の疑いもない。私は躊躇しなかった。急いで瀕死の支那兵の胸に照準を付けると、引鉄を引いた。支那兵は動かなくなった。……

この部分を戦後あらためて書きくわえたかれの心事は、どう推測したらよいか。「麦と兵隊」における一曹長の捕虜斬首を「人間的」「ヒューマニズム」の立場から非難する意味あいで描いたとすれば、「瀕死の支那兵」を射殺するかれの行為は、おなじ立場からして正当だとする判断がなくてはならない。が、本質的に一曹長の行為とかれのこの行為とにどれだけのちがいがあっただろうか。このばあい、おそらく、すでに「瀕死」であり、放置していてもやがて死ぬにきまっている、しかも「懇願」している、それならば苦痛の時間をちぢめてやるのが武士の情だ、と判断したとしか考えようがない。もしそうだとすれば、この一種の「安楽死」思想は、あくまでも自己弁護的な論理であって、「三十六人、皆殺し」に「怒り」、「嘔吐を感じ」たかれが、じつは最後の一人にとどめをさすことによって同罪をおかすと同時に、自己矛盾におちいったことになる。だがそのことに気づいていない。かれの発砲を小隊長がとがめたのにたいして「どうして、こんな無慙なことをするのかと云いたかった」かれの心中は、文の前後関係からすると、けっして「三十六

人、皆殺し」を「無慙」といっているのではなく、死にぞこないがでるような不完全な処刑のしかたを非難したとしかよみとれない。したがって「麦と兵隊」の削除部分にしても、もし死にきれぬ捕虜がいたとしたら、「土と兵隊」のばあいと同様に、銃をとってとどめをさす可能性はじゅうぶんにありえたのである。「悪魔」にならずにすんだのは、惨殺の主役を演じなくてすんだということであって、その行為にたいして決定的に対立する立場に、かれが確固として自分をすえていたということではない。でなかったのならば「処分する」ときいて、のこのこと「ついて行ってみる」気になったのはなぜか。そこで人道的「処分」がおこなわれるだろうと想像するほど、戦場にふなれな兵隊ではなかったはずだ。しかし、こういう場面にのぞんで、かれに一片の人間的な衷情もなかったなどとは断定できないであろう。もとより、それはあったにちがいない。が、それは、よりおおくかれの武士的気質に由来するものであり、現実に眼のまえに演じられているにもかかわらず、ほんらいの天皇の軍隊にはあってはならない、あるべきはずのない例外的な行為であるという認識があり、そのあってはならぬ例外への反発であったとみるべきであろう。「惨苦と犠牲」に黙々として耐える天皇の兵たちへのかれの共感・賛美や、武士の情からとどめをさすかれの行為などとあわせ考えれば、そうみるほかはないのである。非難・反発といっても、それは絶対的なものではなく、究極的にはその主役である曹長とあまりへだたりのない立場にあったというべきである。しかし、ここで問題にしたいのは、そのように火野が、大局的にみれば侵略軍としての日本軍隊の性格につよく規制されながら、その軍隊内において自己を天皇の軍人として正統な立場にあるものと信じこみ、自己の本質的なありようにまで迫ることがなぜできなかったかという点についてである。

「日記形式は、それはどのような断片であろうとも経験による以上、ともかく事実にそくし、少しの修飾や虚構なしに再現できる力強い即実性をもてる。即ちひとつの強いリアリティをもてる」[33]という、方法にかかわる問題がそこにはある。伊藤整が「純文学の写生法」の「勝利」[34]とほこらしげに主張したこととともつらなる問題である。火野自身は「ありのまま書き止めて置く」（「麦と兵隊」前書）「もとより小説ではありません」（「土と兵隊」前書）と書きしるしていたにもかかわらず、戦後には「すべて事実にもとづいたルポルタージュで、一行一句もフィクションがないと思っている人もあるようだが、そうではない。私は作家として、これを創作と考え、適当な文学的処理をした」[35]といいかえているが、かれが「文学的処理」としてあげているのは、かれに戦争の本質が把握され、戦争や日本軍隊についてのかれの観念が変革される可能性をはらんだ虚構

ではなくて、まったくデティールの加工にすぎない。「作家として」などといえるようなものではなく、一篇の全体的な性格は、ほとんど事実にそくした記録とみてさしつかえないのである。

ここで日記形式の私小説的方法の限界を指摘して「戦争の全体性を描写し、表現することはできない」[36]というのに異論はないが、なぜそのような方法をとるにいたったかについてすこし言及しておきたい。すでにみてきたように、火野をはじめとして兵隊作家たちは、しばしば自己周辺の兵隊たちに驚異の眼をみはっている。この兵隊へのあらたな認識と感動は、ますみずからを兵隊らしい兵隊にむかって変革しようとする志向――ゆきつくところは、いわゆる「近代的」知性の放棄――をうみ、それと連関していままでの自己の「一片の人間私情を操る」文学を否定する契機にもなっている。しかも、かれらが志向した兵士像は、これらインテリ作家たちには、現実におけるあたらしい人間像として眼にうつったばかりでなく、いままでのかれらの文学に登場しなかったという意味で、文学的にもあたらしい人間像としてうつったのである。したがって、それまで想像もしなかった戦場という環境で、つきつきに接触する兵士たちの思考と行動とが、まったく斬新なものにみえて、かれらに文学によってあたらしい人間像を創造する必要を感じさせず、現実にあるままの兵士像をうつしとればよかったという事情があったのだ。

そこに日記形式という私小説的方法を採用した必然的な理由があったといわねばならない。文学によって創造すべき人間像と、現実にかれらが発見したあたらしい人間像とのとりちがえがあった――プロレタリア文学にもおなじ現象がおこった――ところに、じつは文学が文学として自立しえなかった、すなわち、これらの作家たちが文学を政治に屈服させることになった根本的な原因があったとみることができよう。そうであったからこそ、その政治に身をゆだねてしまうことによって、かんじんの戦争の全貌や本質を描きだしえなかったのであるし、また文学の創作過程をとおして自己変革をとげる、とくに戦争と自己との関係を歴史的制約をこえてとらえなおすことができなかったのである。それは戦闘に埋没して戦争をみうしなうことを結果する方法であった。その意味で「戦争文学」とよばれるこれらの諸作品の基本的性格は、「戦争」文学ではなく「戦闘」記録であったと規定しなければならない。

しかし、その記録が異常に広般な国民各層にうけいれられたのは、[37]「力強い即実性」「強いリアリティ」のゆえであったにちがいないが、読者である国民のがわからすれば、この戦争をいわれるとおりの「聖戦」と確信すればするほど、兵士たちの命がけの行為は疑いをさしはさむ余地のない、あるいは疑うことを許さぬ戦場のメカニズムと人間とのぬきさしならぬ関係がもつリアリティとしてうけとら

れたのだ。だから戦場・戦闘など未知の非日常的事件や環境にたいする関心があったばかりではなく、巨大な戦争の進展につれて、やがて、みずからもその命をかける場にたたねばならぬと覚悟したとき作品の登場人物の身のうえは、けっして他人ごとではなかった。あるいは、やがて戦場にむかわねばならぬ家族や友人をもつ人たちも同様であったろう。いってみればほかならぬ国民のひとりである兵隊作家と、その戦闘記録と、それに自己や自己周辺の人びとの運命をよみとらざるをえなかった国民とは、いずれもおなじ時代の激動におしながされているという一点において、共通の枠にしばられていたことになる。一種の戦時共同体意識とでもよぶべきものが、これらの記録のリアリティを国民につよく印象づける基盤であったといわねばならない。この時期に、これらの記録が文学よりも、おおくの国民のこころをとらえた理由をここにみることができる。

㉜ 注⑬におなじ、四三六頁。
㉝ 注④におなじ、二〇九頁。
㉞ 注⑦におなじ。
㉟ 注⑬におなじ、四二五頁。
㊱ 注④におなじ、二一〇頁。
㊲ 火野自身「兵隊三部作」の発行部数について「二百万か二百二十万くらい」といっている（注⑬におなじ、四二八頁）。

5

「戦闘記録」はしょせん記録にすぎない。しかし記録であることによって、中野重治が指摘したように、「侵略戦争というものの残虐さ」や「それを仕方のないこととして肯定する作者たちの立場」や「作者たちがむかしながらの日本的人情主義によって逃れたいと焦っていること」などを「暴露」[㊳]する機能をはたしたということはいえる。だが、あくまで侵略戦争の枠組のなかに閉じこめられ、しかもその戦争を肯定する立場にたちながら、その限度内で相対的にそれははたされているというべきであろう。あの苛酷な弾圧の時代にあって、そういう限界はあるにしろ、その「暴露」がそれとして評価されるべき意義をもっていることはもちろんだが、問題はむしろ、なぜ、そういうところに火野をはじめ、これらの作家たちがおちいったのか、それをあきらかにすべきであろう。かれらの記録の方法が私小説的リアリズムにならざるをえなかった事情は、すでにのべたが、この問題もまたその事情と関連する。かれらが兵隊らしい兵隊に徹しようと志向したとき、かれらのそれまでの知性は、かれらの文学をもふくめて、民衆にねづよくうけつがれていた日本の伝統的な精神や意識や行動様式に復讐され、そして粉砕されたのだといわねばならない。人間のありかたとしても、感覚・意識・思想としても、

伝統的なそれに屈服してしまったのである。いいかえれば、かれらの知性が国民的伝統を通路としないで、それと無媒介に成立していたために、戦場・戦時という異常環境におかれると、たあいなく崩壊する根のあささしかもっていなかったことを意味する。明治以来の『外発的開化』の一つの結末が、無残な失敗というかたちであらわれた」と指摘される「一九四五年の大きな歴史的事実」[39]の兆候が、このときこのようなかたちで、すでに潜在していたのである。「上からの近代化」にうかされて成立していた「近代的」知性や自我のみごとな破産であるともいえる。しかし、このことはかれら兵隊作家ばかりにおこったのではない。戦争が苛烈になってくるにつれて、わが国の西欧的知性のチャンピオンたちにも、同様の現象がおこっている。「近代の超克」「世界史的立場と日本」[40]などの座談会は、それのもっとも典型的なあらわれであった。ねづよい伝統そのものに密着し、しかもなおそれを変革しようとすることをとおして成立した、つまり、きたえられた知性や文学でなかったところに、伝統による復讐という戦時下の決定的な悲劇がおこったのだ。戦争のもたらす非人間性に苦しみながら、しかも、その苦しみを解消させてゆく伝統的精神構造につよく規制されていた国民の二重の現実に、日本の文学インテリゲンチアが、文学という創造の場でふかくむすびつくことができず、後者に自己を没入させたところに、その根本的な原因があったといわねばならないだろう。

こういう文学と国民的現実とのかかわりあいがもつ意味は、こんにちの文学状況にもみのがせない問題をなげかけているのではなかろうか。

㊳「現代日本小説大系（河出書房）」第五十九巻「解説」三二三頁。

㊴猪野謙二「日本の近代化と文学」（未来社「日本文学の近代と現代」所収）一一頁。

㊵竹内好「近代の超克」（筑摩書房「近代日本思想史講座」第七巻所収）にくわしい。

（六六・一・三一）